

『ラブレターの代筆業をしています』

小林慎太郎

まず始めにお断りしておきます。

ここから先、成功のためのノウハウや、ビジネスパーソンとしてのスキル向上のために役立つ情報は何も出てきません。最近流行の引き寄せの法則に関することも、片付け術に関することも出てきません。ここから先に書いてあることは、何も引き寄せないし、何も片付けません。むしろ、とっちらかった文章が続くばかりです。

ですので、それらの情報を期待している方は、先を読むのは止めておきましょう。もう一度言います。止めておきましょう。警告しましたよ。後で文句を言うのはなしですよ。

ここに書いてあることは、三十半ばになり、言い知れぬ焦燥感を覚え、戦略もお金もなく、だけども妻もある身ながら自分で事業を始めたサラリーマンの話。ラブレター代筆という得体の知れない仕事を始めた男の話。

起業家の人が書いた本は、大抵の場合、最初は大変だったけど、紆余曲折を経て今は成功していますよ、こんな心構えで、こんなことを実行したら成功する確率が上がりますよ、と説く。でも、ここから先に綴られている話は違う。最初は大変で、紆余曲折を経て、結局今も大変という話。今もちっともお金持ちになっていない話。過去を振り返る余裕がなく、現在進行形の話。

たとえば、付き合っていた恋人に振られた時、アップテンポでノリノリな音楽を聴く人は少ないと思う。多くの人は暗い曲調の失恋ソングを聴こうとするはずだ。ここに綴られている話は、いわば失恋ソング。前向きでポジティブで今が最高に幸せな人には響かないと思う。でも、そうではない人、日々悩み、将来に不安を抱え、それでも前に進まなくてはならず、必死に這い、たまに休み、また這い、たまに笑い、たまに泣く。そんな日々を過ごしている人には寄り添うことができるのではないかと思う。何も得るものはないかもしれないけど、何も奪いもしない。そんなお話です。

三十五歳という年齢は、何ともたちの悪い年齢だと思う。

十五歳の時のように鋭利な野望や性欲はなくなり、野望よりも失望が勝り、性欲よりも食欲が勝るようになる。そして、二十五歳の時のような実直さや謙虚さは影を潜め、中途半端に社歴を重ねた結果、捻じ曲がった尊大さが頭をもたげてくる。更には、三十歳の時のような年齢に対する焦りもなくなり、自身の加齢を受け止めるようになってくる。それが三十五歳。個人差はあれども、見聞きする限り、大概そんな感じだ。少年でもなく、青年でもなく、中年でもない。三十五歳は三十五歳。

ただ、ぎらついた野望や性欲、まっすぐな実直さや謙虚さ、年齢に対する不要な焦り、それらのものがなくなること、視界が開けてくる年齢でもある。そして、見えてくるものがある。

本当は見たくはないのだけど、否が応にも見えてしまう。「死」というどうにも抗うこと

ができない着地点が。

十代の始めに異性を意識し始めるように、二十代の始めに自分の未来を意識し始めるように、三十五歳の僕は死を意識し始めた。そして、言い知れぬ焦燥感を覚えた。

仕事は確かに充実してる。でも、それは、「仕事は楽しいものではなく、つらくて苦しいもの」という前提を受け入れた上での話。友達と居酒屋で飲んでいる時のように、女の子とドライブをしている時のように、趣味に没頭している時のように、純粹に「楽しい」というとそうではない。楽しくはないけど、つらさの中に楽しさを「見い出す」ことができる、というレベル。

「あれ？そういうものだと思いついてたけど、本当にそれでいいんだっけ？」

「いや、俺に聞かれてもわからないし」

「このまま死んで、俺、大丈夫？」

「いや、わかんないし」

「俺、何歳まで生きられるの？今、人生全体の何合目くらい？」

「いや、だから知らねえって言ってるし。うざいな」

僕の頭の中で、自分が自分と問答を始めた。

「俺が今死んだとして、後悔を残して死んだとして、誰か責任取ってくれるの？」

「いや、だから・・・」

「確かに、今はそれなりに楽しいかもしれない。でも、世の中にはもっと楽しいことがあるはずじゃない？何で楽しいことを追求しないの？何でわざわざ我慢なんかしてるの？」

「うーん・・・」

「このまま俺ずっと、自分の意思ではなく、誰かの意思を実現させるために生きていくの？自分の好きなことやらないの？そんな悠長なこととしていいの？」

「・・・それは駄目だと思う」

結論が出た。自分の声に従い、僕は、「今」を否定することにした。

そして、始めた。自分で事業を始めることにした。誰かの意思ではなく、自分の意思を尊重するために。楽しさを「見い出す」のではなく、丸ごと「楽しい」ことをするために。

とはいえ、そこは三十五歳という年齢。「全部リセットして、ゼロからスタートだ！」とはいかない。十代のように無計画に何かを始めるには背負うものが多く、二十代のように思いだけで突っ走るには知恵やしたたかさが身につきすぎている。

会社員として働きつつ、平日の夜や週末といった、空いている時間を利用して自分の事業を始めることにした。別に顧客がいるわけでもなければ、仕事があるわけでもない。いきなり大きく出る必要はない。スモールスタートというやつだ。堅実に進めようとする自分に少し物足りなさを覚えつつも、この歳になって新しいことを始めようとする自分に頼もしさも感じていた。

そして、事業としては「話す」こと「書く」ことを軸に展開することにした。何故なら、

自分が「楽しい」と思うことを追求するために事業を始めたわけであり、そして、僕は「話す」と「書く」ことが好きだからだ。これらを仕事にすれば、絶対に楽しいと思った。

そして、具体的なサービスを考え始めた。まずは、「話す」こと。その当時、僕は人事部門で働いており、会社説明会など、人前で話す機会を多く得ていた。自然と、人前で話すことが得意だった（自己評価）ので、プレゼンテーション指導をサービスの一つとすることにした。また、人事として新卒・中途採用の面接官なども務めていたため、そこで培った知識を活かすべく、就職・転職支援もサービスに加えることにした。

次に、「書く」こと。プレゼンテーション時に活用する資料や、会社説明会の際に活用する資料など、資料作成には自信があったため（自己評価）、ビジネスシーンにおける資料作成もサービスに加えることにした。

そのような流れで、(1)プレゼンテーション指導 (2) 就職・転職支援 (3) 資料作成。この三つを僕はサービスとして提供することにした。

ただ、ここで一つ問題が浮上する。
競合他社が多すぎる。かつ、全然面白くない。

プレゼンテーション指導、就職・転職支援、資料作成。グーグルで検索してみると、それらをサービスとして提供する会社は無数に出てくる。そして、それらの会社の代表の経歴を見ると、誰も彼もが説得力のあるきらびやかな経歴を持っている。

そんな中、どの馬の骨だかひょうろく玉だか茶坊主だか知れない僕などに依頼をしてくるわけではない。少なくとも、僕なら僕に依頼をしない。

そして、それよりも何よりも問題なのは、ちっとも面白くないこと。サービス内容が真面目すぎる。確かに、プレゼンテーションも就職・転職相談にのることも、資料を作成することも、好きといえば好きだ。でも、ワクワクしない。ドキドキしない。ゾクゾクしない。

何を仕事にしたらワクワクするかな、と一考した結果、僕は〈ラブレター代筆〉をサービスの一つに加えることにした。唐突なのだけれど、そうした。

「書く」という軸で考えた時に、ラブレターがふっと浮かんだ。何故なら、僕は好きな人ができると、必ずラブレターを書いて送っていた。告白する時もそうだし、付き合い始めてからも節目節目にラブレターを送ったりしていた。このご時世に、わざわざラブレターで想いを伝えていたことに、何か特別な意図はなかった。「手書きの文字の方が自分の想いが伝わるから」だとか、「LINEやメールで想いを伝えるのは何だか味気ないから」だとか、「小林さんって素っ気なさそうに見えて実は古風なところがあるのね、もう素敵!」というギャップを見せつけるためだとか、そういうことではない（いや、正直に言おう。ギャップは少し狙った）。

そういうことではなく、単純に、自分の想いを紙にしたためるといふ行為が面白かった。書いている時間を楽しんでいただけのこと。

だから、ラブレターを書くことを仕事にしたら楽しいだろうな、という発想から、それをサービスに加えることにしたのだ。

ただし、ラブレター代筆がお金を生み出すことはないだろうな、と思った。普通に考えて、そもそも自分の想いを伝える際にラブレターという手段を選ぶ人も多くないだろうし、更には、赤の他人に書いてもらおうと考える人などいないだろう。更に更に、赤の他人の中でも、書くことのプロでも何でもない生粋のアマチュアであるこの僕に依頼をする人がいるとは到底思えない。

でも、それで良かった。ラブレター代筆はあくまでも客寄せパンダのような位置づけで考えていた。「ラブレター代筆って何それ？そんなことを仕事にするなんて馬鹿じゃないの、ハハッ。笑っちゃうよね、フツッ。愚かだよね、へへッ」といった感じで面白がってもらい、噂が広まってくれば良いと思った。入口としてラブレター代筆を通して僕の活動を知ってもらい、結果として、プレゼンテーション指導や就職・転職支援を利用してもらえるような流れを作れば良いと思ったのだ。

とりあえず、提供するサービスは決まった。次に僕がとりかかったのは、社名を考えること。正確に言うと、まずは会社設立ではなく個人事業主として活動をすることにしていたので、社名ではなく屋号だ。屋号を考える上で、僕が意識したことは「会社っぽさ」を出すこと。

得体の知れない三十五歳の男が、得たいの知れないラブレター代筆なんて仕事をしているのだ。怪しすぎて誰も依頼をしようとは思わないだろう。だから、「会社っぽさ」を出すことで安心感を与えたかったのだ。

活動のコンセプトとしては、「話す」「書く」という行為を通して、誰かが誰かに想いを伝えることを支援する、というものだったので、心を伝えるという意味で「デンシン」という言葉を入れようと思っていた（今考えると何とも安易な命名だけれど、その時は「伝心」をカタカナにしちゃうあたり、結構尖ったセンスだな、フフ。と悦に入っていた）。

ただ、会社ではないので、株式会社〇〇のような表現はできない。株式会社デンシンならわかるが、ただ単に「デンシン」だけだと、会社なのかあだ名なのか何なのかまったくわからない。

「どうもはじめまして。デンシンの小林です」と名乗られたら、十人が十人、「はっ？デンシン？電信柱？天使？」と混乱をするだろう。これでは安心感どころか、不信感を助長してしまう。

困った。これから活動をしていく上で、屋号はとても大事だ。妥協はできない。それから数日間、僕は屋号で頭を悩ますことになる。

屋号決定のきっかけは突然に訪れた。

ある日、僕は仕事において、ワークスアプリケーションズ社の人と名刺交換をする機会があった。ワークスアプリケーションズは会計や人事給与管理のためのソフトを開発・販

売する大手企業だ。

「ワークスアプリケーションズ・・・、何だかかっこいい社名だな」と思うとともに、僕はふと、「デンシンアプリケーションズ」ってちょっといいかもしれないな、と思った。会社っぽい感じもするし、いまだきな感じもする。うん、いいぞ。これはいい。

ただし、問題があった。僕の活動は、アプリケーションなどまったくの無縁だ。「話す」「書く」を主サービスとする、超がつくほどのアナログ企業である。さすがに屋号と活動内容に差がありすぎるとまずいため、泣く泣くデンシンアプリケーションズはあきらめた。ああ、また振り出しか・・・。と落胆をした直後、ん？待てよ。「ワークス」も響きとしては悪くないなと思った。会社っぽさもあるし、何だか活動的な印象も受ける。「デンシン」＋「ワークス」で「デンシンワークス」。いいね！いいね！これにしよう。

そのような過程を経て、個人事業主としての屋号は「デンシンワークス」に決定をした。依頼主の方から、

「え？デンシンワークスさんって小林さんが個人事業主として一人でやられてるんですか？てつきり、五〇人くらい社員がいる会社かと思いました。それを知ってたらお願いをしなかったかもなー、誇大広告ですね、ハハハ」

と、誉め言葉のような悪口のような悪口を言われたことがある。まあ、「会社っぽさ」という点では成功をしたのだろう。

名前は決まった。あとはホームページと名刺を準備できれば、活動を開始できる。本来であればどちらも外部に制作をお願いしたいところだが、お金がない。収入が得られるようになったらあらためて作り直せばいいや、と考え、どちらも自分で制作をした。両方とも手作り感満載の拙い仕上がりになったが、「拙さ」を「温かみ」と解釈し、とりあえずは良しとした。

準備は整った。本業と並行して、デンシンワークスとしての活動を僕は開始した。

一ヶ月間、何も仕事は来なかった。

まあ、当たり前と言えば当たり前の結果。何故なら、デンシンワークスのことなど誰も知らない。ホームページはあるけれども、ホームページ創世記の頃のようなレトロなデザイン、構成で、SEO対策など無縁。〈プレゼンテーション指導〉、〈就職対策〉など、サービスに関連するワードはどれも人気ワードで、当然のことながらデンシンワークスはネットの海の奥深くに埋もれている。ネットの中でデンシンワークスのホームページを見つければ、徳川埋蔵金を見つけるに等しい。

「起業」という言葉は甘美な響きだが、現実はその甘くはないことを早速思い知った。当たり前前のことながら、営業、広報、経理、人事等、会社においてはどこかの誰かが担ってくれている役割を、すべて自分で負わなくてはならない。そして、徳川埋蔵金レベルの見つけにくさ、という問題に直面をしていた僕は、営業、広報といった職種の重要性を痛感

していた。

僕は三十歳の頃に、経営学を学ぶべく会社員のかたわら大学院に通学をしていた。そこではファイナンスやマーケティング、組織論等について学んだが、埋蔵金問題に頭を悩ませていた僕には役に立たなかった。何故なら、自分の会社をいかにして知ってもらおうか、ということ、つまり営業なり広報領域のことは何ひとつ学んでいなかったから。

このままでは十年経っても仕事は来ない。いや、百年の歳月を経ても来そうにない。待っているだけではなく、こちらから知ってもらおうべくアプローチをしなくてはならない。ということで、僕はチラシ配りをすることにした。デンシンワークスのチラシを作り、街中で配ることにしたのだ。認知度アップのための施策Ⅱチラシ配り、という発想は何とも貧弱だが、四の五の言っているような状況ではない。まずは行動だ。

お金がないので、チラシ作りも勿論自分でおこなった。案の定、人の温もりをひしひしと感じる仕上がりになったが、ないよりはましだ。チラシを配る場所に関しては、人通りが多そうということで新宿で配ることにした。

週末、僕は新宿南口の大通り沿いに立っていた。手にはコンビニで印刷をしたチラシ五十枚。チラシを印刷したまでにはいいものの、なかなか人に渡すことができない。チラシ配りをした経験はなく、どうやって渡していいのかよくわからない。

気後れしてしまいこのまま帰ろうかとも一瞬思ったが、コンビニで印刷をしたチラシはカラー印刷で一枚五十円もかかっている。誰にも渡さずに帰ることはできない。

ええい！と気合を入れた僕は、足早に歩いて来た三十歳くらいの男性に、「よろしくお願います！」と言いつつチラシを差し出した。とうとう一歩を踏み出した。自分で自分を誉めてあげたい気分だった。だが、男性はチラシに見向きもせずに通り過ぎて行った。

ああ、やっぱり帰ろう。印刷代などたかが知れている。

渾身の「よろしくお願います！」を無下にされ心が折れかけたが、何とか踏ん張り、それから声をかけ続けた。えらいもので、最初の一人目に声をかけるのは大変だったが、それ以降は抵抗がなくなり、どんどんと声をかけることができた。ただ、誰も受け取ってくれない。

週末の土曜日。晴天の新宿南口にて、三十五歳の妻子持ちがラブレター代筆などと書かれた手作りのチラシを配っている。そして、誰も受け取ってくれない。俺は何をやっているんだろうか・・・、と自分の姿を俯瞰して見た僕は、何だか笑えてきてしまった。

しかしながら、その瞬間は突然やってきた。

「よろしくお願います！」と差し出したチラシを、二十歳くらいの女性が受け取ってくれたのだ。チラシを受け取ってもらっただけの話だが、物凄い達成感があった。デンシンワークスという名前を考えるのに四苦八苦した自分、ホームページ作りに奮闘した自分、一ヶ月間まだかまだかと仕事が来るのを待ちわびた自分、色々なことが走馬灯のように頭を駆け巡った。

我ながらハードルの低さに辟易とするが、本当にそれくらい嬉しかった。僕はチラシを受け取ってくれた女性の後姿をずっと見送った。その女性から「付き合ってください」と言われたら、その時の僕はきつと快諾したと思う。正直なところ、容姿はお世辞にもタイプとは言えないが、そんなことは関係ない。何故なら、チラシを受け取ってくれたのだから。それだけで、恋をする理由としては十分だ。

一人が受け取ってくれたら、それからは五人に一人くらいは受け取ってくれるようになった。おそらく、余裕が出たことで表情が柔らかくなったのと、声にハリが出てきたのが理由だと思う。見ず知らずの人に声を掛けてチラシを渡すという行為が楽しくなってきた。受け取ってくれなくても何とも思わなくなった。

辺りが暗くなってきたところで、チラシ配りを終えることにした。五十枚すべてを配ることはできなかったものの、三十枚ほど配ることができた。反省点として、意識していたわけではないものの（いや、きつと意識をしていた）、きれいな女性に絞ってチラシを渡していたような気もするが、それはご愛嬌。何はともあれ、気持ちのよい高揚感が僕を包んだ。

今度から、ティッシュもチラシも全部受け取ることにしよう。自分がやってみたことで苦勞を知った僕は、そう決意をすると新宿をあとにした。

それでも、仕事は来なかった。

新宿にてチラシを配ってから一週間ほど経っても、状況は変わらなかった。そもそもきれいな女性がラブレター代筆や就職支援など必要にするわけないかと思ひ、新宿以外の場所で何回か老若男女、美女醜女、分け隔たり無く配ってみたものの反応は変わらない。

あれ？もしかして俺は既に死んでいて、誰にも俺の姿は見えていない？チラシを配ったつもりになっているけど、実は誰も受け取っていない？ホームページも実は死者にしか見えてない？

現実を受け入れるのがつらく、自分を死んだことにし始めようとしていた頃、とうとう初仕事が来ることになる。

ある日、ホームページのお問合せフォームを通して、仕事が舞い込んだ。それも、依頼など来るはずもないラブレター代筆の仕事。

来た！来た来た来た！高鳴りすぎて止まってしまいそうな胸を抑えつつ、メールを開いた次の瞬間、僕は首を傾げた。

『はじめまして。お手紙を書いて頂きたいです。ただし、文面はこちらで考えるので、文字だけお願いします。』

メールにはそう書かれていた。文字だけ書く？理解ができなかった。ホームページのサービス案内のところに、そのようなことを請け負っていると書いた覚えはない。文面を考

えるのなら、文字もそのまま書けばいいじゃないか。何でわざわざお金を出して僕に依頼をする？

それに、僕は友人なら誰しもが知っている悪筆だ。メモ書きした字を読むことができず、メモがメモの役割を果たしていないことなどしょっちゅうだし、「小林」と書いた書類を見て、「山本さんですか？」と問われたことがあるほどだ（ちなみに、五回に一回は「小村さんですか？」と言われ、十回に一回は「小森さんですか？」と問われる）。

まあ、とにかく字が汚いということだ。あまりにも不可解であったため、僕はその旨を率直に問うた。すると、

『病気の影響で身体が不自由なのです。自分の字が余りにも汚いため、代わりに字を書いて欲しいのです。』

と返事が返ってきた。

それ以上の詮索を止め、僕はとにかく引き受けることにした。

何はともあれ、待ちに待った初仕事だ。何回かメールを通してやり取りをした後に、僕は依頼主から文面を受け取った。わずか二百字くらいのごく短い文章だ。この程度の分量を誰かに依頼をしなくてはならないこと。身近な誰かではなく僕のような得体の知れない人間に依頼をしなくてはならないこと。依頼主の状況に想いを馳せる。

デパート内の文具店にてレターセットを購入し、意気揚々と書き始めたのも束の間、十文字くらい書いたところで、自分の字の汚さに嫌気が指す。

誰かに代理をお願いしようかと思つたが、代筆の代筆とはもはやわけがわからない。何とか自分で書こうと奮起をするが、やはり汚い。字が汚いのを誤魔化すために、相田みつをのように、味のある字に見せかけようと汚い字を更に崩して書いてみたりもしたものの、味が出ることはなく、ただ単にますます字が汚くなるだけに終わる。仕方ない。凡人だもの。

書いて捨て、書いて捨て、そんなことを二時間ほど繰り返した後、ようやく納得のいく字を書くことができた。たったの二百文字くらいを書くのに、短編が書ける位の文字数は書いたのではないかと思われる。少なくとも、疲労感はそのくらいあった。

力の入らなくなった手で手紙の写真を撮り、依頼主に問題がないか確認するために送る。二十分後くらいに依頼主から「問題ありません」との返答を得る。「問題あります」だったら本気で誰かに依頼をすることも検討をしていたため、ほっと胸を撫で下ろす。

文字の代筆代金が千円。それに対して、レターセット代金及びハンバーガー、ポテト、ドリンク代（ファーストフード店で手紙は書いていた）は二千円はかかっただろう。そして、自分自身に対する嫌悪感、及び書道を習わせてくれなかった両親に対する憎悪はプライレス。収支としてはマイナスイス。

それでも、今まで味わったことがない達成感を僕が包む。誰の力も借りていない。小林

慎太郎が裸一貫で手にした千円だ。三十五歳にして始めて、僕は「お金を稼ぐ」ということを知った気がする。

『この度は、ありがとうございます。頑張ります。』

依頼主からあらためてメールが送られてきた。

僕は、小林慎太郎であることが誇らしかった。

そこから三週間、四週間に一人の割合で、ラブレター代筆の仕事が来るようになった。最初の仕事をもらった後、ホームページをフリーランスで活動をされている方に格安で作り直してもらった影響が大きいと思う。それまでは本当に死者にしか見えていないのではないだろうかと言っていたが、ホームページを作り直してからは、「ラブレター 代筆」でグーグル検索で一位ないし二位に表示されるようになった。ようやく生きている人にも見えるようになったわけだ。

ただ、当初期待をしていたプレゼンテーションや就職・転職支援の仕事はほとんど来ることはなく、大半はラブレター代筆の仕事だった。

依頼内容は様々。離婚をした奥さんと寄りを書きたいので、そのための手紙を書いて欲しいというご依頼。奥様が病気になる、そこで初めて自分は今まで妻に対して何ひとつ労いの言葉をかけてあげていなかったことに気付いた。感謝の言葉を贈りたいが、口で言うのは気恥ずかしいので、代わりに感謝の手紙を綴って欲しいというご依頼。遠距離恋愛中の彼女にプロポーズをしたいので、ラブレターを書いて欲しいというご依頼。年代も背景も様々な人から依頼が来た。

ただ、共通して一つ言えることがある。

どの依頼主も「想いが強い」ということ。

前述したように、ラブレター代筆をサービスとして加えた際、依頼が来ることは期待をしていなかった。そして、万が一来たとしても、ちら大のちらサーに所属しているちらい大学生が、「ちす、何か好きな子がいるんすけど、自分、本とか読まないし、いつもはLINEで会話してるんで、どうやって文章を書いていいかわかんなくてー、んで、たまたま代筆サービスってのを見つけて、自分で書かなくていいし、楽そうなんでちよつと依頼しようと思ったんすよ、ハハハ。ちす」

というノリで依頼をして来るものと思っていた。だが、蓋を開けたらまったく違った。

ただ、よくよく考えてみれば「想いが強い」のは当然かもしれない。何故なら、LINEやらメールやらコミュニケーション手段が数多くある中で、ラブレターというコミュニケーションツールを選択し、さらにそれを僕のような赤の他人に依頼をしようというのだから、想いが強くないわけがない。排水の陣、藁にもすがる思いで僕のところ相談に来

ているのである。

甘く見ていた！と自分を悔いると同時に、やりがいありすぎ！と僕は感動していた。

会社の仕事においてやりがいがないかと言うと、決してそんなことはない。それなりに裁量も与えられているし、権限も与えられている。誰かのためになっているという実感も少なからずある。

ただ、僕の仕事が誰かの人生に入り込んでいるかというのと、そうではないと思う。誰かの「生活」に入り込むことはできていたとしても、「人生」に入り込むことはできていない。でも、ラブレター代筆の仕事は違った。確実に誰かの「人生」に入り込めているという実感があつた。依頼主との会話を通して、その人の人生の奥深いところに触れているという実感があつた。依頼主と僕、お互いに会社や肩書き、スーツを取り払った状態で接することにより、何物にも守られていない柔らかいところに触れ合うことができた。

そしてまた、「想いが強い」ということ以外にも、依頼主に共通して言えることがあつた。それは、どの人も何かと向き合っているということ。ある人は不自由な身体と向き合い、ある人は妻子と離れた孤独と向き合い、ある人は伝えるべき言葉を伝えられなかった過去と向き合っていた。

「ラブレター代筆業をしています」

そう言うと、大概の人は笑った後にこう言う。

「ラブレターって自分で書くものでしょ？他人に書いてもらってどうするの？」

確かにそうかもしれない。僕も、自分がこの仕事をする前だったら同じような反応をしていたと思う。では、今は違う。先ほども書いたように、どの人も向き合っている。逃げずに、照れずに、斜に構えず、まっすぐに対峙している。そして、自分の想いを最高の形にして届けたい。そう願っている。楽をしたい。手間を省きたい。そういうことではない。僕は数々のまっすぐな想いに触れてきた。だから、「他人に書いてもらってどうするの？」とは言えない。書くのが自分なのか他人なのかはあまり重要ではないと正直思っている。重要なのは、伝えたい想いが本物かどうか。それだけだ。僕は想いを形にするだけであり、想いをつくることはしていない。

ラブレター代筆という仕事は、口にするたびにいつも笑われる。でも、僕は誇りに思っているし、人の想いを綴ると言う仕事は意義のある仕事だと思っている。そしてまた、自分の想いを誰かに伝えるということ、伝えられるということがどれだけ価値のあることかも僕は知っているつもりだ。

二十代の終わり頃、僕には付き合っている女の子がいた。

その子は中国からの留学生で、飲み会で知り合った。昼は日本語学校に通い、夜はクラブでアルバイトをしていた。漫画を入口として日本に興味を持ち、一年ほど前に日本に来たとのことだった。将来は日本でイラストレーターとして働きたいと言っていた。何とか

日本語で会話はできるものの、お世辞にも上手いとは言えなかった。「付き合っている女の子がいた」と書いたが、正直なところ、付き合っていたのかどうかよくわからない。正式にどちらかが告白をしたわけでも何でもない。それでも、週の半分は一緒に過ごしたり、彼女の家に泊まることもしょっちゅうだった。

「お腹が空いた」

と言われれば、いつも近くの牛間屋に牛丼を買いに行き、

「映画が見たい」

と言われれば、近くのレンタルビデオ屋で『となりのトトロ』を借りに行かされた。

「俺はパトロンか」と愚痴をこぼすと、彼女は意味を理解してとぼけているのか、本当に意味がわからないのかは定かではないが、不思議そうに首を傾げた。

愚痴をこぼしつつも、僕は嫌ではなかった。そういう風に扱われたことがなかったので、新鮮だった。それまでに付き合った子はどちらかというと育ちが良くおっとりとした感じの子が多かったが、彼女は違った。

彼女が住んでいるアパートは壁が薄く、隣の部屋の物音がよく聞こえた。隣の声がよく聞こえるということはこちらの声もよく聞こえるということで、彼女が友達と中国語で電話をしていると、

「隣の女、中国人なんだけど、電話の声がうるせーんだよ」

と会話をしている声が聞こえたりもした。

また、隣の部屋の住人はギターを弾くらしく、昼でも夜でもよくギターの音が聞こえてきた。大体的場合はすぐに飽きるようで五分もすると音は止むのだが、たまに五分経っても十分経っても二十分経っても、ずっと鳴り止まない時があった。そうすると、「やめとけよ」という僕の制止を聞かず、彼女は勢いよく部屋を出て行き、「うるさいよ！」と言いなから隣の部屋のドアをどんと叩く。

そうかと思うと、夜中に「ねえねえ。来て来て。さびしいよ」というメールを送ってきたりもする。そして、寝ぼけ眼で彼女の家に行くと、無言でずっと抱きついてきたりもした。

彼女の気性の激しさに時におののきつつも、それなりに楽しい日々を過ごしていた。ただ、多くの中国人がそうであるように、彼女も日本人に対してあまり良い印象は抱いていなかったようで、「日本人、あまり得意じゃない」とことあるごとに大声で言うのには参った。

半年ほどそんな日々が続いた頃、彼女が二週間だけ中国に帰国することになった。空港まで迎えに行った僕に、彼女が小さく折りたたんだ紙を手渡した。何事かと訝る僕に、

「昨日、あまり眠れなかったから書いた」

と彼女は照れながら言った。

彼女を見送った後、僕は折りたたまれた紙を広げた。

『行ってきます。帰ったらまた遊ぼうね。日本人、あまり得意じゃないけど、あなたはちよつといい。すき。』

それだけ書かれていた。

ただ、彼女が帰ってくることはなく、それ以来僕と遊ぶことはなかった。

交通事故に遭ったらしい、と彼女と同じ日本語学校に通っていた子から聞いた。「らしい」なので本当かどうかよくわからない。何か事情があつて日本に帰れなくなっただけかもしれないし、日本に帰ってきたけれど、僕のことを嫌いになつて連絡をくれなただけかもしれない。

今考えてみても、彼女はずるい。汚い字ではあつたけれど、彼女は僕に想いを伝えた。

でも、僕は彼女に何も伝えていない。伝えたことといえば、「つゆだくで」と言えば牛井のつゆは増量してもらえらることと、『となりのトトロ』よりも『天空の城ラピュタ』の方が玄人には人気があるということくらい。想いは何も伝えていない。

代筆でも何でもいい。想いは、伝えられる時に、伝えておくべき人に、伝えておくべきだと思う。だから、想いを伝えるお手伝いができるということは、僕にとっては本当に価値のある仕事だ。

ラブレター代筆という仕事の特異性もあつて、徐々にデンシンワークスの認知度が高まってきた。ウェブメディアで取り扱ってもらつたり、ラジオに出たり、テレビにも出させてもらった。

こいつは忙しくなつてきやがったな。などと鼻息を荒くしていたのも束の間、正負の法則とはよく言ったもので、負が僕を襲ってきた。

会社の中で、僕が副業をしていることが問題になつたのだ。自分の中ではラブレター代筆も真剣にやっているのだから本業なのだが、そんな屁理屈は通用しない。事が大きくなつた背景としては、僕は人事や総務、法務部門などいわゆるバックオフィス部門の責任者を務めていたこともある。つまり、就業規則を始めとする社内のルールを社員に守らせなければならぬ立場の人間が、副業禁止という規則を、自ら率先して破つてしまったのだ。

「特別な立場を利用して勝手なことをしてる」

「会社の仕事はやる気がないんじゃないか」

「管理職失格」

色々な批判が耳に入ってくる。

言い返す言葉はなかった。至極正論だ。

そういう言葉に対しては特に傷つかなかつたが、陰で社長に告げ口のようなことをされたのはつらかつた。

「周りの人間が不満を持っているみたいだね。もう僕の一存ではおさまらないから、部長会で説明をするように。そこで了承を得られれば良しとしよう」

と社長に言われた。

部長会というのは各部門の責任者が週に一回集まって、会社のことについて意見を交わす場だ。そこで僕の副業のことについて説明をし、副業をしても問題ないとの理解を得られれば、そのまま副業を続けて良いとのことだ。

社長の温情は嬉しかったが、僕は暗澹たる気持ちになった。各部の責任者十人ほどが集まる場で、デンシンワークスについて説明をする。プレゼンテーション指導や就職・転職支援について説明をするのは一向に構わないが、ラブレター代筆について説明するのは何とも気恥ずかしい。代筆業に誇りを持っているものの、それとこれとは別の話だ。

ただ、ここで引くわけにはいかない。デンシンワークスの活動を止めるつもりはない。

もし認めてもらうことができなかったら、その時は会社を辞めようと思っていた。僕は自分の意思で自由に動けることの素晴らしさを知ってしまった。会社の看板も肩書きも何もない状態で仕事を獲得することの難しさと、獲得した時の喜びを知ってしまった。しがた時の感動を知ってしまった。そして何よりも、自分の仕事が誰かの役に立っているという実感を知ってしまった。

それらに比べたら、会社にいることで得られる安定や自尊心は大したものではない。家族には申し訳ないが、僕は僕の人生を生きたかった。デンシンワークスの活動を止めるという選択肢は、僕の中にはなかった。

結果としては、会社員として働きながら、デンシンワークスの活動を続けることを認めてもらうことができた。会議室のスクリーンにデンシンワークスのホームページがでかかると映し出された時は噴き出しそうになったが、笑っている場合ではない。僕は映し出されたホームページをもとに、デンシンワークスの活動目的と活動内容について語った。話をしながら、僕は何だか妙な気持ちになってきた。

もともと、デンシンワークスは「話す」「書く」を軸にサービスを展開してきた。それは、単純に僕が「話す」こと「書く」ことが好きだったということもあるし、もう一方で、「話す」という行為、「書く」という行為を通して、誰かに想いを伝えたいけど、上手く伝えることができないという人を支援したいと思ったためだ。なぜなら、僕自身が誰かに想いを伝えるという行為が苦手で、それができないつらさをよく知っていたからだ。

学生の時であれば、「伝える」という行為が苦手でも、何とか成立をするかもしれない。でも、社会に出てからは違う。伝えなければ誰も理解してくれないし、伝えなければ誰も動いてくれない。つまり、伝えることができなければ、何も物事は前に進まない。そして、僕は何も前に進めることができなかった。

それでも、たくさんの冷や汗と、たくさんの恥をかき、自分なりに努力をすることで、「伝

える」ということが苦手ではなくなった。

そんな僕が、会社の管理者層が集まる場で、恥ずかしさはあれども特に緊張することなく、堂々と自身の活動について説明ができています。そのことが、説明をしながら何だか不思議に思えてきたのだ。デンシンワークス代表としての自分が、過去の自分を助けてくれている。そんな気もした。

何はともあれ、(1)本業に支障が出ないようにすること(2)会社と同じような事業をしないこと、という2つの条件を守るという前提で、デンシンワークスとしての活動を続けることを認めてもらえたのだ。

起業をした人が書いた本を読むと、起業しイケてる、サラリーマンはダメ、みたいな表現をされていることが少なからずある。そういう表現を目にすると、僕は眉をひそめたくなる。組織に属せずに、自身で事業を展開しお金を得ることの難しさや価値は僕もわかる。だからといって、サラリーマンとして安定的な収入を得ることが容易いかといえば決してそんなことはないし、組織に属することの難しさや苦勞もよくわかる。サラリーマンはダメどころか、僕はかなりイケてると思う。かつこいい。

僕の父はあるテレビ局で働いていたが、役所勤めかと思うくらいかつちりとした服装で毎日出勤をしていた。生活態度も堅実でギロツポンでチャンネエとシーソーのようなことはなく、毎日九時くらいには必ず帰ってきていた。

何だか地味だなあ。もつと派手に生きればいいのに、と子供の頃は思うこともあった。でも、自分が社会に出てみて、その考えはすぐにあらためた。流されず、浮かれず、ぶれずに、地道に働くことがどれだけ難しいことかを痛感した。

きつとこれといった夢がなく、流されるようにサラリーマンになったんだろうな、と思っていた時もあった。でも、ある時父の実家に家族で帰省をした際、父が学生時代に使っていた部屋で一枚の色紙を見つけた。父に宛てた寄せ書きだった。内容を見るに、父が大學生だった頃に送られたものようだ。メッセージの中に「映画」や「監督」といったフレーズが目につく。そういえば、父が大学生の頃に映画研究会に所属していたことを母から聞いたことがあった気がする。テレビで映画が上映されると、子供たちをおしのけ、ウイスキーをのみながらじっと見入っていた父の姿を思い出した。

夢がない人などいない。憧れがない人などいない。誰しもが何らかの夢を抱き、夢に破れ、現実を知り、現実を飲み込み、生きている。夢がある人とならない人がいるのではなく、存在するのは夢が叶った人とそうでない人だ。

六十歳の頃に肺がんを患い、死線をさまよい、何とか生き延び、その後会社に再び復帰した父の姿を見た際、世間一般でいうように「サラリーマンは会社の歯車」「サラリーマンは安定志向」といった表現は嘘っぱちだと思った。歯車などではない。サラリーマンには意思があり、誇りがあり、矜持がある。安定志向などではない。それは粘りであり、責

任感であり、意地だ。

誰かが誰かの生き方に口を出すことほど野暮なことはない。サラリーマンでも起業家でも野球選手でも俳優でも医者でも弁護士でもスーパーの店員でも吟遊詩人でも何でも、生きていく限りは、そこには人生があり、意思がある。独立独歩だから偉い、組織の傘の下だから偉くない、などという区分はない。デンシンワークスを自分で始めてみて、あらためてそのことを痛感した。

最近、デンシンワークス以外にも新たな活動を始めた。

ラブレター代筆サービスをする中で、十代、二十代の人からの依頼がほとんどないことに気付いた。顧客の大半は三十代以上だ。理由は色々あるだろうが、一つは十代、二十代はいわゆるデジタルネイティブで、小さい頃からコミュニケーションツールがデジタルなものであったことが挙げられると思う。想いを伝える際、伝えられる際に、手紙という手段を用いる機会がほとんどなかったのではないだろうか。

だからといって、手紙は素晴らしいよ！LINEやメールではなく、手紙をもっともつと使おうよ！などと野暮なことを言うつもりもない。LINEやメールは僕も毎日使うし、なければ困る。手紙がなくなっても困らないが、LINEがなくなったら大いに困る。

ただ、手紙でしか味わえない感情があることも確かだと思う。ラブレターを書く時の期待と不安と愛おしさが入り混じった甘酸っぱい感情。ラブレターをもらった時の戸惑いと驚きと喜び。それらは、LINEやメールで気持ちを伝える、伝えられた時とは、少し質感が異なる気がする。手紙ならではの。

だから、当然毎日書いてもらう必要などないし、一週間に一回とも、一ヶ月に一回とも言わない。半年に一回だつて求めすぎだと思う。でも、一年に一回、五年に一回、一生に一回でもいいから、手紙を通して誰かに想いを伝える、手紙を通して誰かに想いを伝えられる、ということを経験してみてほしいという気持ちがある。

だから、若い人への手紙文化の普及を目的とした協会（日本〃時には手紙〃協会）という協会を僕は設立した。設立したといっても、ホームページと名刺をとりあえず作っただけではあるけれども。

ここ最近では、会社員兼デンシンワークス代表兼協会会長として活動をしている。もはや、自分でも何者かわからなくなっている。でも、楽しい。だから、今僕がしていることは正しいと思う。

「ねえねえ。好き？」

暗闇のシングルベッドの上で、彼女が唐突に聞いてきた。夜中だというのに、隣の部屋からは重く低く憂鬱なギターの音が聞こえてくる。また苦情を言いに行くのではないかと

僕はひやひやしていたが、機嫌が良いのか、ゆつくりとしたテンポだから逆に心地良いのか、彼女は特に気にしていない様子だ。

「聞いている？」

僕は天井を見つめながら、聞いていないフリをした。想いを伝えるのは苦手だ。

「思ってることを口にしない。あなたも日本人ね」

ふて腐れたように言うと、彼女は寝返りを打ち、僕に背を向けた。

しばらくはギターの音が沈黙を埋めてくれていたが、やがて音は止んだ。気まずい空気が暗闇に広がる。

「お店、辞めたいな」

彼女が言った。最近、この言葉をよく口にする。クラブでの仕事がつらいらしい。

「お客さん、エッチな人ばかり。身体触ってくるし、エッチなこと言ってくる。私の日本語の発音が変だと馬鹿にする。みんな嫌な人。嫌い嫌い」

壁に向かって吐き捨てる。

僕は黙っていた。聞き流していたわけではなく、何か言葉をかけようとは思っているが、何と声をかけていいのかわからない。

僕が言葉を探していると、彼女が急に僕の方に身体を向け、

「あなたがしゃべるの下手なの知ってる。だから、手紙を書いて。『好き』って書いて。いい？」

と言った。よくはないのだが、断ったら彼女が怒ることは明白だったので、

「わかった、わかった。いいよ」

と答えた。僕の返答を聞いた彼女は、「OK」とつぶやくと、再び僕に背を向け、そのうち寝息を立て始めた。

「ラブレターの代筆業をしています」と言うと、大概の人は笑う。それはそうなるだろう。でも、僕は真剣だ。何故なら、僕に依頼をしてくる人々は真剣だから。「ラブレターを他人に書いてもらうって心がないよね」と言う人がいる。でも、誰かに自分の想いを伝えたい、と思った時点で、そこには想いがあり、心があると僕は思う。想いを伝える手段も重要かもしれないが、それよりも何よりも重要なのは、手紙でも電話でもメールでもLINEでも何でもいいから、自分の想いを伝えること。伝える相手がいる時に伝えること。それに尽きると思う。

だから、僕は今日も書く。誰かの想いを文字にする。誰かの想いを誰かに伝えるために。誰かの想いを誰かの心に届けるために。